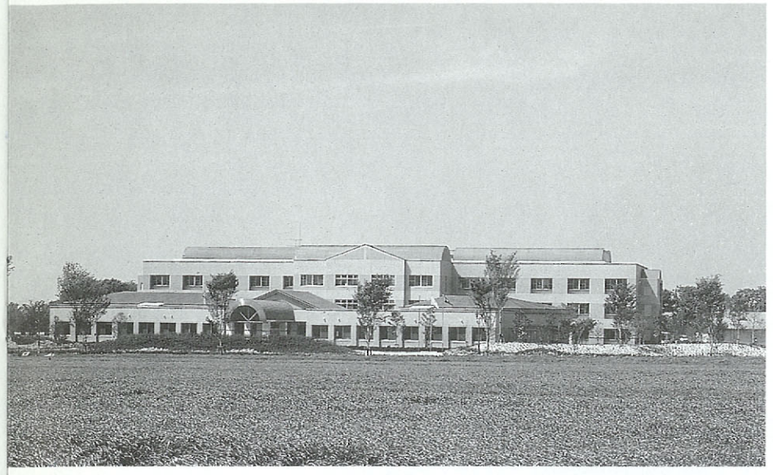
プッシュアップ KUMAMOTO

二十一世紀の熊本農業 そのビジョンを映して

●熊本県農業研究センター



二四ヘクタールという広々とした緑の台地に、ここ熊本県農業研究センターはたたずんでいます。玄関に入ると、ロビー中央に緩やかな弧を描いたプリズム彫刻。太陽の恵みを受けて実る農業のシンボルです。広場のステンレス板に反射した太陽の光がこのプリズムに当たり、二筋の鮮やかな虹を映し出します。

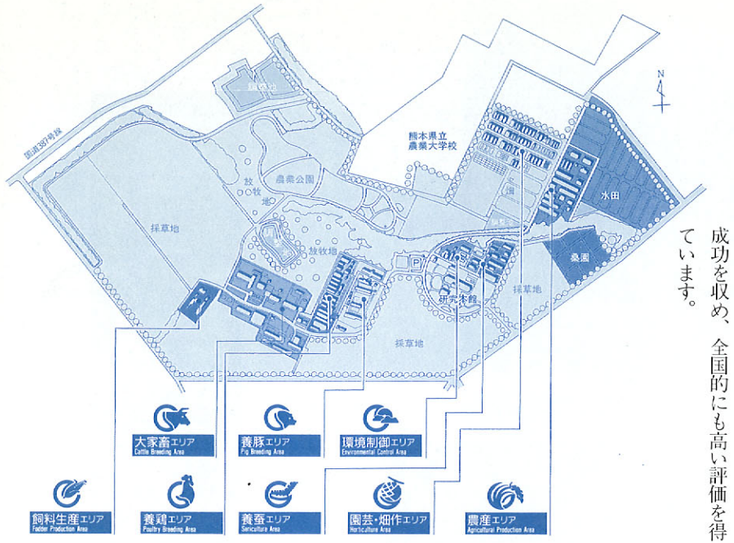
農業粗生産額全国第六位。一戸当たりの農業所得全国第三位。中核農家※戸数全国第二位。熊本県は、全国でも有数の食料供給基地です。日本一のスイカやメロン、イ草などを中心とした多角的な経営。そして、消費者のニーズをいち早く捉えた柔軟な対応。それが熊本農業の強さの要因と言えるでしょう。

今や、日本は飽食の時代。世の中には食物があふれ、消費者は品物をよく吟味して選ぶようになりました。これは生産者側にとってみれば、激しい競争の時代の到来なのです。更に、二年後には牛肉・オレンジの輸入自由化が迫っており、農業は今、厳しい環境に置かれています。これを反映して、国や各都道府県の農業研究機関は、どこよりも高品質の農産物づくりを目指して、品種改良や低コスト生産技術の開発などにしのぎを削っています。

熊本県でも、現状に機敏に対応できるよう、県下に分散していた試験研究機関を統合。菊池郡合志町に熊本県農業研究センターが設立されました。これによって、ひとつのプロジェクトの研究成果が共用でき、情報面でも施設面でも無駄のない効率的な研究体制がシステム化されたわけです。

農業研究センターは、大きな柱として次の三つの役割を果たしています。

1、試験研究機能の強化・技術革新の拠点
2、農業技術情報の発信基地
3、地域に密着した開かれた試験場



1. 試験研究機能の強化・技術革新の拠点

熊本では、既にバイオテクノロジーなどの先端技術を取り入れて研究を行ってきました。カーネーションやカスミ草の無病苗の生産、東京の市場で最も高値がついた温州ミカン「金峯」の品種育成、牛の受精卵移植など数々の成功を収め、全国的にも高い評価を得ています。

しかし、これからは高品質・低価格を追求した、より一層の努力が必要。研究本部では、無菌室や電子顕微鏡など、最新の設備を使って試験研究が進められています。

また、農産物ごとに八つのエリアに分け、品種別、地域別の研究が行われています。このうち「環境制御エリア」の温室施設では、阿蘇の気候も天草の気候も自由に作り出すことができ、作物の適地性がいながらにして分かります。「農産エリア」では、バイオによるうまい米づくりの第一人者新関宏夫氏を特別研究員として迎え、熊本に適した米の開発に積極的に取り組んでいます。

2. 農業技術情報の発信基地

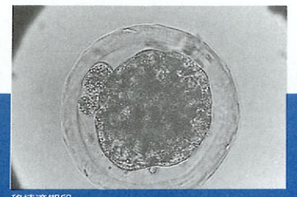
研究本部では、コンピューター施設を導入。第一弾として気象情報システムに着手しました。気象は、農産物の収穫を左右する大きな要素です。天候の異常を事前にキャッチし、それに備えることによって被害を最小限にくい止めることができます。気象情報システムは、センターと農業改良普及所とをつなぎ、農業経営者に早く気象情報を伝えようとするものです。将来的には、この他、流通や技術情報のネットワーク化を目指しています。

3. 地域に密着した開かれた試験場

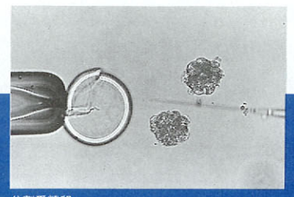
センター内には、農業に携わる人や技術者が自由に出入りし、利用することのできる「開放実験室」や「農事相談室」、それに「農業公園」が設けられる予定。これからの農業は、消費者との距離を縮めることが大切です。「農業公園」は、たとえば採れたての牛乳が飲めるなど、訪れた人々が楽しく農業と触れ合いをもてる場になるよう計画されています。

強い風が吹きつけてもぐらつくことのない〝足腰の強い農業〟、そして激しい競争下でも生き残れる〝付加価値の高い農業〟ーその知恵と力の源泉となることを目指して、熊本県農業研究センターは今、新たな一歩を踏み出したのです。

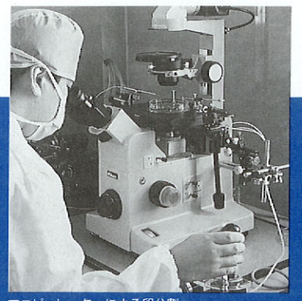
※中核農家…60歳未満の男子専業農業従事者がいる農家



移植適期卵
受精後7日ころ(桑実期)



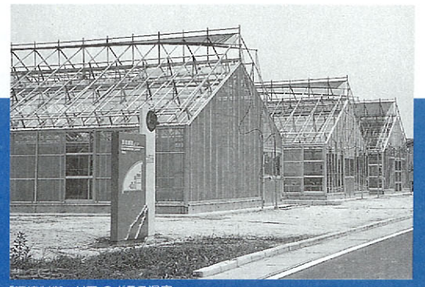
分割受精卵



マニピュレーターによる卵分割

受精卵移植技術

受精卵移植による子牛



「環境制御エリア」のガラス温室